




Data
監督：レイフ・ファインズ
原作：ウィリアム・シェイクスピア 『コリオレイナス』
脚本：ジョン・ローガン
出演：レイフ・ファインズ / ジェラルド・バトラー / ヴァネッサ・レッドグレイヴ / ジェシカ・チャステイン / ブライアン・コックス / ジョン・カニ / ジェームズ・ネスビット / ポール・ジェッソン / ルブナ・アザバル

👁️👁️ みどころ

ローマの孤高の独裁者マーシアスと敵国の将軍オーフィディアスとの宿命の戦いを軸とした、シェイクスピアの「悲劇」が現代劇として登場！

『ウエスト・サイド物語』（61年）のすばらしさは別格だったが、民主主義が機能不全に陥り、ノー天気な二等国に落ちぶれようとしている今のニッポン国を考えながら、本作を観れば、実に興味深い。民衆はバカ！独裁は必要！最近どこかで聞いたことがあるようなフレーズに思わずボンと膝を打ってしまいそうだが、さてあなたは？

民主主義には弁論術が大切なことをよく知っている松下政経塾出身の国会議員たちは、今こそ本作から説得術を学ばなければ・・・。

-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*-----*

■□■シェイクスピアの悲劇を現代劇に！■□■

シェイクスピアの悲劇を現代劇に移し替えて大成功したのは、モンタギュー家とキャピュレット家の対立の中で生まれたロミオとジュリエットの悲劇を、シャーク団とジェット団の対決の中で生まれたトニーとマリアの悲劇に移し替えた『ウエスト・サイド物語』（61年）。すばらしい振り付けと多くの名曲を伴ったミュージカルにしたところがさらにすごいアイデアだったし、ナタリー・ウッドとジョージ・チャッキリスの最高の演技を引き出したロバート・ワイズ監督の演出も見事だった。同じような試みはその後再三なされているが、本作はシェイクスピア最後の悲劇と言われている『コリオレイナス』を、舞台でも演じたことのあるイギリスの名優レイフ・ファインズが主演し、かつ初監督した作品。

都市の名前はローマだし、元老院があり、護民官がいる。そのローマへの侵攻をくり返

しているのはヴォルサイ人の將軍タラス・オーフィディアス（ジェラルド・バトラー）だが、舞台を現代に移し替えただけにその戦闘シーンはアフガン戦争、イラク戦争における「地上戦」そっくり。前半のハイライトシーンとなるヴォルサイの都市コリオライでの戦いのシーンは、『ハート・ロッカー』（08年）（『シネマルーム24』15頁参照）を観ているようだ。私を含め多くの日本人はシェイクスピアの『コリオレイナス』には馴染がないだろうが、今から約2000年前（？）のローマでくり返されていた政争とそれによる外国（ヴォルサイ）からの侵攻の姿を見ていると、今のニッポン国の危機にそっくり……。本作のような悲劇を生み出さないために、こりゃしっかり学ばなければ……。

■□■執政官の選出手続に注目！■□■

映画は「私たちにパンを！」と要求し、暴動寸前になっている民衆のデモ行進（？）のシーンから始まる。これを扇動するのが指導的政治活動家のタモラ（ルプナ・アザバレ）とカシアス（アシュラフ・パルフェム）であり、また護民官のシシニアス（ジェームズ・ネスビット）とブルータス（ポール・ジェッソン）。このデモ行進はローマの將軍であるケイアス・マーシアス（レイフ・ファインズ）が民衆に対する穀物の支給に反対したために起きたものだが、マーシアスは軍隊を配置してこれを蹴散らすと共に民衆たちの無責任さを口汚く（いや、理路整然と？）公言したから、民衆たちのマーシアスに対する反発が高まったのは当然。しかし、オーフィディアス率いるヴォルサイ人たちの十数度目の侵攻に対してマーシアスが英雄的に戦いこれを撃退したため、マーシアスの友人であり元老院議員のメニーニアス（ブライアン・コックス）はマーシアスを執政官に推薦。さてその展開は？

この執政官選出手続に見るローマの民主主義の実態は面白いのでそれに注目！

■□■マーシアスの信念とは？これぞまさに独裁？■□■

自分自身は執政官の地位など全く興味がないマーシアスがあえて執政官「選挙」に出馬したのは、メニーニアスの他、母親ヴォルムニア（ヴァネッサ・レッドグレイヴ）の強力な影響があったから。マーシアスここでは少しは民衆向けのソフトな言動を見せたが、その信念は変わっていない。その信念とは、極端に言えば「国に対して忠誠を誓い、命を投げ出すことのできない民衆はバカだ。そのバカを守ってやっているのは俺だから、民衆は俺の言うとおりに従え」というものだ。これぞまさに「独裁」だが、他方、そんなマーシアスの信念と行動によってヴォルサイ人の侵攻からローマが守られてきたのはれっきとした事実だ。今のニッポン国のような何も決められない民主主義も最悪だが、本作の執政官選出劇にみるローマの民主主義も最悪。また、昨年11月の大阪市長選挙をめぐるのは「独裁」の是非をめぐる論争も起きたが、本作を観ていると独裁の必要性も理解できそう

だ。

本作の原題はシェイクスピアの原作と同じく『Coriolanus（コリオレイナス）』。

これはマーシアスが執政官に選出されようとした際に与えられた称号で、「コリオライの包囲戦」で武勲を挙げたことに由来するもの。ところが、シシニウスとブルータスはいったんは選出されたかに見えたマーシアスの執政官選出に異議を唱えたと共に、巧妙にマーシアスを挑発してマーシアスの「独裁」性を浮き彫りにしたから、形勢は逆転！いわば、民衆の力＝民主主義の力によって、マーシアスは死刑こそ免れたものの国外追放処分となることに。しかし、こんな政局をくり返していいの？また、真にローマのことを考え、命をかけて戦っているマーシアスのような英雄を追放して、ローマの国防は大丈夫なの？



『英雄の証明』2012年2月25日(土)、丸の内ルーブルほか全国ロードショー

HP: www.eiyu-shoumei.jp (C) Coriolanus Films Limited 2010

■□■恨みと憎しみ、反発と畏敬の中での男の決断とは？■□■

日本による植民地支配が続いた韓国では日本(人)に対する「恨(ハン)」の感情が今なお強いが、人間心理の描写に長けたシェイクスピアが本作で描く恨み、憎しみ、反発、畏敬などの感情描写は見応えがある。シェイクスピア劇は重厚なセリフが生命線だが、マーシアスがローマを追放された時に言い返す長ゼリフに注目！そのポイントは お前たちは俺を追放したことをきつと後悔する 自分の方からローマを追放してやる 世界はローマだけではない、という3点だが、その後マーシアスが向かった先はオーフィディアスがいるヴォルサイ人の国だったからビックリ。マーシアスはなぜよりによって長年にわたる宿敵であり、「命をかけて殺してやる！」と息巻いていたオーフィディアスのところへ？

他方、オーフィディウスはマーシアスの突然の訪問(出現?)に対していかなる対応を? 項羽と劉邦は最後まで戦って雌雄を決することになったが、中国の『三国志』でも日本の戦国時代の戦いでも、降伏した敵将を懇ろにもてなし、自国の重要な將軍に据えるという例は多い。そこには、たとえ宿敵であっても英雄は英雄、と互いに畏敬の念を持った男同士のドラマがよく生まれるが、さて本作では?

■□■この「ノー天気」さは、まるで今のニッポン国? ■□■

2001年4月から5年半にわたった小泉(長期)政権の後、日本は安倍、福田、麻生、鳩山、菅と1年毎に政権が代わるという先進国では珍しい状況が続いたが、菅政権の後を引き継いだ野田政権も今や風前の灯火? そんな危機的状況の中、橋下徹大阪市長率いる大阪維新の会が急速に影響力を拡大しているが、この間のニッポン国はいって平和で、暴動の1つも起きていない。デフレが続く中で貧乏にも馴れ、就職難にも馴れ、沖縄の普天間問題や竹島問題、尖閣諸島問題などどこ吹く風で、毎日アホバカ・バラエティーを楽しむ余裕がまだまだ残っているらしい。「政治討論番組」を見ても互いに足の引っ張り合いをするだけで、最高裁判所から違憲状態だと指摘された国会議員の定数は正も、歳費削減も全く実行できない状態だ。しかして、本作に観るマーシアスを追放した後のローマにおける護民官や民衆たちのノー天気さは?

それはまるで、つかの間の平和(?)を楽しむだけで、次第に自分たちが中国に追い越され近い将来その“自治州”になるのではないか、などとは夢にも考えていないニッポン国そっくり! ところが、ヴォルサイ人の国にマーシアスを迎えたオーフィディウスはローマに対するマーシアスの復讐心を高く評価し、共にローマ侵攻の体制を着々と整えていたから、その侵攻が始まれば、1939年9月1日に始まったナチス・ドイツによるポーランド侵攻以上のスピードでローマは陥落すること必至?

■□■理と情はどちらが? 弁論術・説得術の巧みさに注目! ■□■

理と情はどちらが重い? ヤクザの世界では、高倉健が歌った『唐獅子牡丹』の歌詞にあるとおり、「義理と人情を秤にかけりや、義理が重たい男の世界」らしいが、知的な市民が集まっているローマでは、さて? ギリシャ・ローマ時代に民主主義の基礎が築かれ、弁論術が発達したことはよく知られているが、執政官選出劇の中で展開される弁論術をみているとそれがよくわかる。もっとも、人の説得にはどちらが正しいかだけでなく、どれだけ人の情に訴えられるかも大切なことが、マーシアスと母親ヴォルムニアとの「議論」を聞いているとよくわかる。マーシアスが執政官になることはヴォルムニアの長年の夢だったが、最後の詰めでマーシアスが本性を剥き出しにしたばかりにそれに失敗。ヴォルムニアとマーシアスの妻ヴァージリア(ジェシカ・チャステイン)はその恨みを2人の護民官にぶつけたが、それは後の祭だった。

ところが、ヴォルサイ国からマーシアスとオーフィディアスが共同してローマに侵攻してくることを知った2人の護民官は、手の平を返したように、まずマーシアスが政治の師と仰いでいたメニーニウスに仲介を依頼。そしてそれがダメだとわかると、今度はヴォルムニアに仲介役を依頼したから何ともいえない加減なものだ。ローマのためと割り切ったヴォルムニアは、ヴァージリアと1人息子を連れ連れてマーシアスにひざまずいて許しを請うたが、さてオーフィディアスが見守る中、マーシアスの決断は？

日本の国会で展開されているクイズのような討論や、揚げ足取りばかりのテレビでの政治討論に見馴れた目には、本作にみる講和をめぐる弁論術・説得術の巧みさは興味深い。本来「松下政経塾」ではこういうことを教えていたはずだが、政権の中枢にキラ星のように集まっている野田総理をはじめとする、その教え子たちの弁論術・説得術は？

■ラストの「悲劇」をどう見る？こりゃ男の嫉妬心？■

マーシアスが信念の男であること、また母親の説得による迷いや確執はあるものの結局決してその信念を曲げられないことは、本作を観ているとよくわかる。多くの時こんな信念はマイナスに働くものだが、国家が危機的状況にある時は？マーシアスを演じたレイフ・ファインズはそんな男の苦悩をオーバーアクション気味ながらも見事に演じている。その点は、母親のヴォルムニアを演じたヴァネッサ・レッドグレイヴも、宿命のライバルとして恨み合っていたオーフィディアスを演じたジェラルド・バトラーも同じだ。もっとも、「両雄並び立たず」の鉄則は古今東西生きているし、オーフィディアスがそれを十分認識していることはヴォルサイ人の陣営に迎え入れた後のマーシアスの人気の沸騰がりを気にかけるオーフィディアスの姿を見ているとよくわかる。したがって、ローマ侵攻については、オーフィディアスがマーシアスにどんな権限を与えどんな役割を果たさせるのがポイントだが、オーフィディアスはマーシアスのやりたいようにやらせている感がある。

ローマからの講和申し入れについても、いくらマーシアスとマーシアスの母親との間の交渉を認めても、最後の決定権はマーシアスではなくオーフィディアスが持っているのが当然だから、マーシアスが勝手に講和条約を結んだなどという論点は絶対生まれないはずだ。つまり、レイフ・ファインズ監督はあえてそこらあたりをボヤカしたわけだが、その間少しずつマーシアスに対するオーフィディアスの嫉妬心が助長されていたことはまちがいない。嫉妬心は女の専売特許のような言い方がされるが、それはまちがいない。権力争いをする男たちの嫉妬心はきわめて強く、それが次の政権誕生の原動力になることも多いのが歴史的事実だ。しかして、本作のラストに向けた「悲劇」をどう見る？この悲劇の原因の大半は男の嫉妬心。私はそう見たが、さてあなたは・・・？

2012（平成24）年2月25日記